

立川断層帯について

立川断層帯は、名栗断層と立川断層から構成され、埼玉県飯能市から東京都青梅市、立川市を経て府中市に至る断層帯です。全体として長さは約33kmで、概ね北西-南東方向に延びています。

政府地震調査研究推進本部では、平成25年1月1日を算定基準日とした主要な活断層や海溝型地震の発生確率を公表しています。立川断層帯における長期評価で予想した地震の規模はマグニチュード7.4程度、地震発生確率は30年以内が0.5%~2%、50年以内が0.8%~4%、100年以内が2%

~7%となっており、日本の主な活断層における相対的な評価では「やや高いグループ」に属しています。

昭島市の北部から東部にかけて近接している断層（帯）ですが、断層の特性が完全に把握されている訳ではありません。

いつ起こるか分からない地震に対して、ご家庭での備蓄や家具の転倒・落下防止、自宅の耐震化、家族間での連絡方法の確認など、日ごろの備えをしておくことが大切です。

立川断層帯の長期評価の概要

(算定基準日 平成25年(2013年)1月1日
政府地震調査研究推進本部の公表結果(平成25年1月11日公表)

断層帯名	長期評価で予想した地震規模	日本の主な活断層における相対的評価 (注2)	地震発生確率			平均活動間隔 最新活動時期
			30年以内	50年以内	100年以内	
立川断層帯 (注1)	マグニチュード7.4程度	やや高いグループに属する	0.5% ~ 2%	0.8% ~ 4%	2% ~ 7%	10,000年— 15,000年程度 約20,000年前— 13,000年前

注1：平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震に伴い、糸魚川-静岡構造線断層帯(中部 牛伏寺断層)、立川断層帯、双葉断層、三浦半島断層群、阿寺断層帯(主部/北部(萩原断層))では、地震発生確率が表の値より高くなっている可能性がある。

注2：日本の主な活断層の中で「高いグループ」「やや高いグループ」とは…今後30年間に地震の発生する確率(最大値)が、
3%以上：高いグループ
0.1%以上-3%未満：やや高いグループ

立川断層帯での昭島市の被害想定

東京都防災会議は、平成24年4月に「首都直下地震等による東京の被害想定」を公表しました。

立川断層帯については、平均活動間隔が10,000~15,000年程度であり、今後30年間の発生確率は0.5~2%

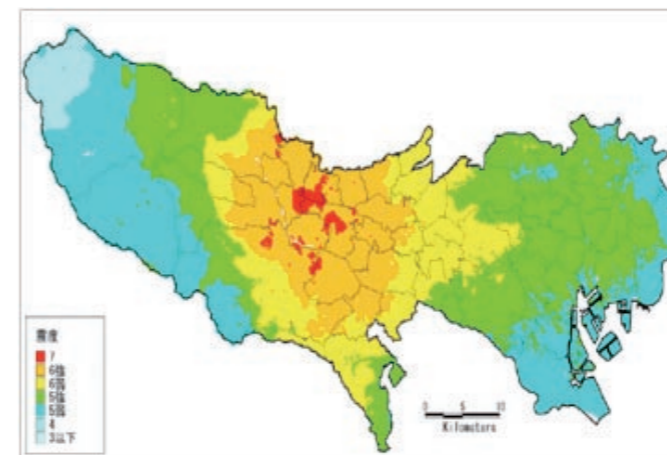
と低いが、発生した場合に断層帯を中心に大きな被害を及ぼすおそれがあります。

昭島市においては、大半が震度6強となり、一部震度7が想定されており、最も大きな被害が想定される地震です。

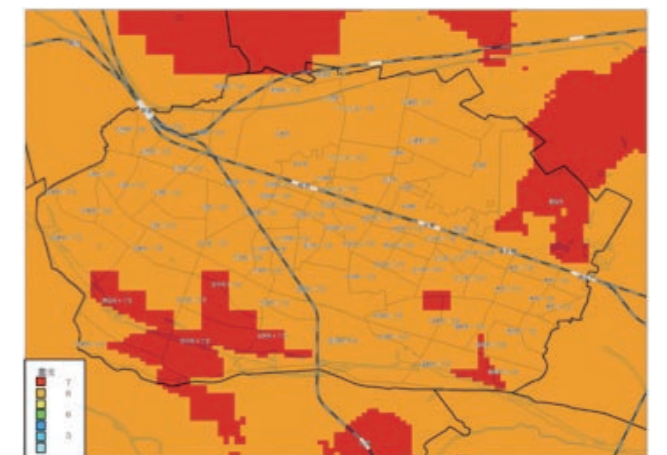
区分	内容					
	被害想定項目	東京都全体	区部	多摩地区	昭島市	
前提条件	震源地 規模 季節・時刻 気象条件	立川断層帯 破壊開始点が断層南側 M7.4 冬の夕方(午後6時)市の死者・負傷者・自力脱出者は午前5時 風速8m/秒				
震度別面積率(%)	5弱以下	28.9	29.4	28.6	0.0	
	5強	34.7	62.6	19.9	0.0	
	6弱	17.5	8.1	22.5	0.0	
	6強	17.6	0.0	27.0	88.4	
	7	1.3	0.0	2.0	11.6	
人的被害	死者(人)	ゆれ等	1,526	39	1,487	158
		火災	1,056	83	973	9
		計	2,582	122	2,460	167
	負傷者(人)	ゆれ等	27,768	2,965	24,803	1,908
		火災	3,922	273	3,619	15
計 (内重傷者)		31,690 (4,668)	3,238 (395)	28,452 (4,272)	1,923 (327)	
物的被害	建物被害(棟)	ゆれ等	35,407	470	34,936	2,604
		火災	50,328	4,445	45,883	1,972
		計	85,735	4,915	80,819	4,576
避難者の発生(ピーク:1日後)(人)		1,007,138	108,053	899,086	45,900	
帰宅困難者(人)		4,714,314	3,790,824	923,490	25,772	

各計において、小数点以下の四捨五入により、合計値が合わないことがある。

立川断層帯での震度分布



平成24年4月「首都直下地震等による東京の被害想定」報告書から



立川断層帯地震M7.4 震度分布図